

平成 28 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

開校 2 年目は府立校として新たなスタートをする。1 年目の実践をもとに教育課程を改善し、高等支援学校 5 校の中で本校の特色づくりを進める。

- 1 「やってみよう」と思ったことを途中であきらめず最後までやり抜く経験を積み重ねる学校
- 2 併設する難波支援学校や地域、関係機関との協働の中で豊かな人間性をはぐくむ学校
- 3 働くことを主体的に受けとめ、役割を果たすことを通して自己理解を深め、責任を持って自己選択・自己決定することができる学校

2 中期的目標

1 教育目標を達成し本校の特色づくりにつながる教育課程の編成

- (1) 「専門教科（3 学科 6 コース）」と「共通（3 種目）」を中心とした教育課程について 3 年間の実践を通して改善を図る。
- (2) 3 年間の実践をもとに系統性・継続性の観点から「指導と評価の年間計画（シラバス）」を検討し就労とその定着につながる教育課程を作成する。
- (3) 基本的生活習慣を確立し、すんで体を動かす習慣を身につける指導のあり方について検討する。

2 キャリア発達を支援する教職員の組織力の向上

- (1) 学年・学部・校務分掌の各組織を確立し、計画的に人材育成を図る。
- (2) 教職員一人ひとりが高い人権意識を持ち、内面に迫る指導により生徒が主体的に周囲とかかる態度を育てる。
- (3) 生涯にわたるキャリア発達につながる指導及び支援について教職員の知識とスキル及びチームワークを高める。

3 デュアルシステムの確立と仕事の創出の検討

- (1) 3 年間の実践をもとに本校の特徴と教育目標の観点から検討し、学校を軸とし卒業後の就労とその定着につながるシステムを確立する。
- (2) 実習先や就労先企業・施設等や関係機関とのネットワークを確立し、新たな発想から仕事の創出について検討する。
- (3) 自分のよさや課題等について自己理解を促しシステムに活用することができるアセスメントについて研究する。

4 難波支援学校や地域、関係機関との協働

- (1) 難波支援学校との日常的な共同学習や通学指導、防災・防犯にかかる体制整備等について、併設校の利点を生かした指導のあり方を検討する。
- (2) 地域の高等学校との交流や共同学習を進めるとともに高等学校に必要な支援ができるようセンター的機能を高める。
- (3) 地域、関係機関との連携・協働につながる活動を日常的に位置づける。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 28 年 9 月実施分]	学校協議会からの意見
<p>○生徒、保護者、教職員を対象に実施 保護者や生徒からの回収率が 70% を超える一方で教職員からが 65% にとどまっている。全体が 80% を超えるよう努力し、教職員は 100% をめざしたい。 【学習指導等】 ・保護者で「子どもは授業がわかりやすく楽しいと言っている」が 65%、生徒で「学校生活について先生の指導に納得できる」が 60%、教職員で「教育活動全般にわたる評価を行い次年度の計画に生かしている」 66% といずれも他に比べ少々低い評価になっている。的確なアセスメントに基づき生徒に寄り添った指導と評価を行う指導力の向上に努めたい。 ・学校行事について、教職員で「学校行事が生徒にとって魅力あるものとなるよう工夫・改善されている」が 54% と厳しい評価になっていることについて、行事の一つである 6 月に実施した体育祭について、生徒は「楽しく行うことができた」 77% であるが保護者は「体育祭では学年を超えた生徒の活動が見られた」 68% と少し評価の差が見られる。それぞれの評価の観点が異なるとはいえ、企画する教職員間で目的を確認し、実施方法の工夫・改善を図って評価を上げることができるようにならねたい。 【生徒指導等】 ・保護者が「学校の生徒指導の方針に共感できる」 80% としているが、生徒は「担任以外に相談できる先生がいる」 52%、教職員は「生徒指導の方針を共通理解」 57%、「生徒は担任以外の教職員とも相談できる」 63% と比較的厳しい評価になっている。指導体制の整備に課題が残っている。 【学校運営等】 ・「学校は子どもの障がいや状況についてよく理解している」の設問に保護者が 82%、「生徒の人権を尊重し、日常の教育活動を行っている」の設問に教職員が 83% の評価をしているが、生徒では「学校は私たちのことによく理解してくれている」 65% と差が見られた。個々の生徒の状況にもよるものと考えるが、生徒の肯定的な評価を増やすことができるよう丁寧な生徒理解と明確な方針を持った指導・支援を進めたい。</p>	<p>第 1 回 (7/15) ○今年度の本校の取組みについて ・府への移管を受け、他の高等支援学校や障がいのある生徒が在籍する高等学校での実践に学びながら 2 年目となる教育活動の充実を図ってもらいたい。特に難波支援学校との共同学習や部活動の充実、従来の府立校との教職員の異動等に期待している。 ・就労を考えるとライフスキルとしてソフトスキルを補うと本人が楽になり自己肯定感も高まるのではないか。新しい職種の開拓も重要。 ○教科用図書の選定について ・将来、事務的な仕事に就かなくてもパソコンが使えることは必要。IT 系の授業で資格を取れるようになると自信につながるのではないか。 第 2 回 (11/22) ○学校経営計画及び学校評価の進捗状況について ・ホームページ等での学校からの情報発信は効力が高く重要。充実させてもらいたい。また、授業での SST ワークシートをもっと幅広く使用し、生徒指導でもどの教師も同じところに戻ってくれると生徒にわかりやすく卒業後も立ち返ることができる。 ○授業アンケート及び前期学校教育自己診断アンケートの結果について ・保護者の授業アンケートの回収率を上げる方法を工夫してもらいたい。 ・生徒の自由記述に様々なヒントがあるのではないか。生徒のアンケートは学校で実施したらどうか。 第 3 回 (3/1) ○学校経営計画及び学校評価について ・学校協議会の委員が学校教育自己診断アンケートの結果を見ると学校とはまた違う視点から見えてくるものがある。本校の地域性や併置校があることのよさを生かしてほしい。 ・指導・支援についての研究に関し、自己評価が厳しいようだが計画に沿って研修を行うことはできたもののアセスメントが作成途中で成果報告ができていないことを反映している。 ・教職員のアンケートで「生徒指導の方針を共通理解」が 57% にとどまっているが、共通理解するためには話し合いだけでなく、生徒の個人ファイルを活用するなどの方法も考えられる。その際、生徒を一人の人として尊重することが大切であり、生徒を見るうえで最低限の知識は必要だが、それにとらわれず俯瞰して見ることも大切。</p>

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 教育課程の編成	(1) 「専門教科」と「共通」を中心として各授業の充実を図る。 (2) 実践を通して2年間の系統性・継続性について検討する。 (3) 保健体育及び共通「健康・体力」を中心として基本的生活習慣や体を動かす習慣の形成に向けた授業について検討する。	(1) 「専門教科」各コース間や「共通」接客・販売とコースが計画的に共同学習を行う。 ア 「専門教科」3学科6コースと「共通」3種目の展開デザイン（案）を作成する。 イ 各コース間の受発注や販売を中心としたコース間の重なりから共同学習を実施する。 ウ 担当者が授業略案を作成し担当者間で共有するとともに生徒が見通しを持てるように授業予定を提示する。 エ 見通しを持ち生徒が意欲的に取り組むことができたか学校教育自己診断により評価する。 オ 難波支援学校との共同学習等で販売の機会を持つ。 (2) 二学年で行った授業や行事の自己評価を踏まえ、グループ編成や題材配置、施設設備の使用等の観点からシラバスを見直す。 ア 二学年縦割りで体育祭等を実施し、学年間のつながりを強める。 イ 主担当者が授業略案を作成し担当者間で共有するとともに生徒が見通しを持てるよう授業予定を提示する。 ウ 二学年の系統性・継続性について検討し、より効果的な計画に改める。 (3) 共通「健康・体力」の指導を考慮して保健体育のシラバスを見直すとともに今年度から実施する「健康・体力」のシラバスを作成する。これらの指導が基本的生活習慣や体を動かす習慣の形成にどのように作用しているか評価する方法について検討する。 ア 共通「健康・体力」の指導内容を考慮し保健体育のシラバスを見直す。 イ 共通「健康・体力」の授業評価をもとに次年度に向けてシラバスを作成する。 ウ 主担当者が授業略案を作成し担当者間で共有するとともに生徒が見通しを持てるよう授業予定を提示する。 エ これらの指導と基本的生活習慣や体を動かす習慣の形成との関係を評価する方法を検討する。	(1) ア 学校教育自己診断で「専門教科」と「共通」について70%以上の生徒から「見通しを持ってすすんで活動できた」との評価を得ることができたか。 イ 年間で複数回の共同学習を実施。 ウ 学科長・コース長を中心に担当者会議を定期的に開催（月1回以上） エ 学校教育自己診断で70%以上の肯定的な評価を得る。 オ 販売の機会を年間1～2回持つ。 (2) ア 二学年のまとめが見られ、学校教育自己診断で保護者から「体育祭で学年を超えた生徒の活動が見られた」との評価70%以上。 イ 生徒が見通しを持ち主体的に学習に取り組むことができたか。 ウ 系統性・継続性を評価する観点を明確にし、前期末と年度末に検討する。 (3) ア 保健体育の教科会を年間6回以上開催。 イ 担当者間で授業評価を共有し、シラバスを作成。 ウ 授業予定を提示することで生徒が自主的に活動できたか。 エ 評価指標について検討する会議を年間6回以上開催。	(1) ア 学校教育自己診断（生徒用）Q「見通しを持って、すすんで学習できた」で「専門教科」と「共通」それぞれ83%、74%の生徒が「そう思う、だいたいそう思う」と答えた。（○） イ 文化祭と1月の販売で年間2回の共同学習を実施し、保護者や地域の方など多くの来場者を得た。（○） ウ 担当者会議を定期的に開催することができた。（○） エ アと同じ（○） オ 文化祭と販売学習で年間2回の販売の機会を持ち、それぞれ大盛況の中、実施することができた。（○） (2) ア 体育祭において縦割りの組対抗で競技を実施し学年を超えて応援し合う姿がみられた。学校教育自己診断アンケート（保護者用）「体育祭では学年を超えた生徒の活動が見られた」で68%が「そう思う、だいたいそう思う」と答えた。（○） イ 主担当者が各担当者に略案や口頭で伝え授業内容の共有を図った結果、生徒が自主的に準備を行ったり、自己評価の内容が充実するなど、見通しを持って学習している様子が見られるようになった。（○） ウ 教科会を開き、2学年の系統性・継続性について話し合った。次年度は学年毎のシラバスを作成し、より明確にしていく予定である。（○） (3) ア 保健体育科の教科会を6回開催し、シラバス・指導内容を検討した。（○） イ 担当者間で授業の役割を明確にし、次年度のシラバスを作成している。（△） ウ 生徒自身が活動内容を決定できる場面を設定することで、自主的に活動することが増えた。（○） エ 日常的に体を動かす内容を授業に取り入れ実践し、年間6回の検討会議を持った。今後、授業場面だけでなく自宅でも体を動かせる内容や課題設定について検討していく。（○）

府立なにわ高等支援学校

2 組織力の向上	<p>(1) 校務分掌組織の充実を図り、学部・学年の組織力を高める。</p> <p>(2) 自己肯定感を高め物事との向き合い方に変化を与える指導・支援について研究する。</p> <p>(3) キャリア発達につながる自己理解を促し自尊感情を高める指導・支援ができるよう教職員の知識、技能を高める。</p>	<p>(1) 校務分掌組織を改編し業務を進めながら定期的に評価する。首席から学部主事・学年主任を中心とした連絡系統を確立し、教員間の共通理解を図る。</p> <p>ア 改編した校務分掌組織で業務を進め、定期的に自己評価して次年度の改善につなげる。</p> <p>イ 年度当初に学部内・学年内の連絡系統を確認し、生徒理解、生徒指導に関する情報が円滑に伝えられ共通理解できるようにする。</p> <p>(2) 授業研究を中心に生徒の内面に焦点化した自己理解、自己選択・自己決定につながる指導・支援について研究する。</p> <p>ア 年度当初に授業研究を含む校内研修計画を立てる。</p> <p>イ 計画に沿って組織的に研究を進める。</p> <p>ウ 年度末に評価し、対外的な成果報告を位置づけた次年度の計画を作成する。</p> <p>(3) 教職員が組織的に指導とその評価・改善を積み重ねながらキャリア発達を促す指導法について研究する。</p> <p>ア 年度当初に生徒の状況を共通理解する。</p> <p>イ 日常的なOJTとして指導・支援した成果を検討し共有する。</p> <p>ウ 自己理解を促す、自尊感情を高める指導・支援について研究する。</p>	<p>(1) ア 方法を検討し前後期各1回自己評価して次年度の改善案を作成する。</p> <p>イ 学校教育自己診断で70%以上の教職員から「生徒指導の方針を共通理解することができた」との評価を得ることができたか。</p> <p>(2) ア 研究課題に沿った授業研究を年間3回以上計画・実施。</p> <p>イ 外部講師を招き年間3回以上の研修会を開く。</p> <p>ウ 計画に沿って次年度の研修計画を作成する。</p> <p>(3) ア 学校教育自己診断で70%以上の教職員から「生徒の状況について共通理解することができた」との評価を得ることができたか。</p> <p>イ 指導・支援についてふり返る場を毎月の学年会で持つ。</p> <p>ウ 学校教育自己診断で70%以上の教職員から「目的に沿った研修を通して指導力の向上を図ることができた」との評価を得ることができたか。</p> <p>(1) ア 今年度新たに広報活動等総務的な役割を担う「地域協働部」を組織し、学校行事等での外部との交渉や、ICT機器を活用した発信などを担当した。(○)</p> <p>イ 学校教育自己診断アンケート(教職員用)「生徒指導の方針を共通理解することができた」で「そう思う、だいたいそう思う」が57%であり目標に至らなかった。(△)</p> <p>(2) ア 研究課題に沿った授業研究を5回計画・実施した。(○)</p> <p>イ 外部講師を招き、本校生徒の実態や研究テーマに沿った研修会を3回実施した。(○)</p> <p>ウ 今年度の研究結果を、来年度の研修計画に反映させる。アセスメントについては実施途中であり、成果報告の段階に至っていない。(△)</p> <p>(3) ア 生徒実態把握研修会を開催し、特に配慮の必要な生徒について情報共有し共通理解を図った。学校教育自己診断アンケート(教職員用)「生徒の状況について共通理解することができた」で「そう思う、だいたいそう思う」が71%であり目標を達成している。(○)</p> <p>イ 学年会において生徒の支援、その成果や課題について情報共有を行った。(○)</p> <p>ウ 「自己理解、自己肯定感」をテーマに研修会を開き、それらを高める指導・支援について意見交換を行った。学校教育自己診断アンケート(教職員用)「目的に沿った研修を通して指導力の向上を図ることができた」で「そう思う、だいたいそう思う」が66%であり目標達成に至らなかった。(△)</p>

府立なにわ高等支援学校

3 デュアルシステム確立と仕事の創出	<p>(1) デュアルシステムにつながる評価方法について検討する。</p> <p>(2) 実習先企業・施設を中心に連携を図り、仕事の創出について検討する。</p> <p>(3) デュアルシステムで基礎となるアセスメントについて検討する。</p>	<p>(1) 二学年の現場実習や「専門教科」と「共通」の評価について、それぞれの評価を双方向に反映する方法について検討する。</p> <p>ア キャリア発達につながる自己理解や自己選択・自己決定の観点を意識した評価表（案）を作成する。</p> <p>イ 評価表（案）について実習先から意見を集約する。</p> <p>ウ 互いの評価が次へのステップアップにつながるものとなるよう次年度に向け評価表（案）を修正する。</p> <p>(2) 実習先企業・施設等の協力を得て校内に仕事の創出について検討するプロジェクトチームを設ける。</p> <p>ア 本校の特徴や教育目標について実習先企業・施設等に周知を図る。</p> <p>イ プロジェクトチームのメンバー人選を進める。</p> <p>ウ プロジェクトチームを発足する。</p> <p>(3) 自分のよさや課題を含む自己理解を促すアセスメント（案）を作成する。</p> <p>ア 他校の実践例や先行研究に習い研究部と進路指導部が協力して自己理解を促すアセスメント（素案）を作成する。</p> <p>イ 素案をもとに校内で試行的に評価し、その妥当性について検討する。</p> <p>ウ 関係機関からも意見を集めし妥当性を高めるように努め、アセスメント（案）を作成し次年度の活用につなげる。</p>	<p>(1)</p> <p>ア 要点をおさえた案を作成する。</p> <p>イ できるだけ多くの実習先から意見を集約する。（5か所以上）</p> <p>ウ 計画に沿って次年度に向けた案を作成する。</p> <p>(2)</p> <p>ア デザインを工夫して学校案内を作成し、周知を図ることができたか。</p> <p>イ 前期末までに趣旨を説明して打診を行い、年内に人選を行うことができたか。</p> <p>ウ 年度内にプロジェクト会議を開催し、チームを発足。</p> <p>(3)</p> <p>ア 計画に沿って素案を作成する。</p> <p>イ 妥当性を評価する基準を明確にする。</p> <p>ウ 計画に沿って案を作成する。</p> <p>(1)</p> <p>ア デュアルシステムに向けて検討し、ケアサポートコースで近隣の介護福祉施設での実習を後期から実施した。また、クリーニングコースも近隣施設と連携して清掃活動を定期的に行なった。（○）</p> <p>イ 今年度は試行的に2コースで始め、評価表は各コースが現場実習の評価表を基に作成し教員が評価した。（△）</p> <p>ウ 2コースのみの実施で、実施開始時期も遅くステップアップにはつながらなかった。（△）</p> <p>(2)</p> <p>ア 現場実習のリーフレットを作成し、学校案内と共に実習先に提示し、本校の特徴や教育目標を理解していただけた。（○）</p> <p>イ 関連機関に依頼し、仕事について考えるプロジェクトの外部委員を選定した。（○）</p> <p>ウ 第1回「仕事について考えるプロジェクト会議」を11月15日に開催してプロジェクトチームを発足し、12月15日には第2回「仕事について考えるプロジェクト会議を開催した。両会議ともに有意義な話し合いが行われた。（○）</p> <p>(3)</p> <p>ア～ウ 外部講師の助言を受けながら作成した。評価者間の一貫性や標準化などについて検討し精選した設問を心がけた。（○）</p>
-----------------------	--	---	---

府立なにわ高等支援学校

<p>(1) 難波支援学校との共同学習や通学指導、防災・防犯にかかる体制整備等について検討する。</p> <p>(2) 地域の高等学校との交流及び共同学習を行い、要請を受けて地域の高等学校への支援を行う。</p> <p>(3) 地域、関係機関との連携・協働につながる活動を教育課程に位置づける。</p>	<p>(1) 併設する難波支援学校との連携・協力体制を確立し、共同学習や合同での通学指導、安全指導の組織編成について検討する。</p> <p>ア 両校間の調整を図る会議を定期的に持つ。</p> <p>イ なんば祭や販売での共同学習について検討する。</p> <p>ウ 合同で通学指導や防災・防犯にかかる安全指導を行う体制整備を進める。</p> <p>(2) 高等学校との交流教育ができるよう環境整備を図る。地域の高等学校への支援を計画する。</p> <p>ア 高等学校に交流教育を依頼する。本校及び生徒の特徴や様子について周知を図る。</p> <p>イ 両校生徒による実行委員会を作りながら日常的に交流する。</p> <p>ウ 要請を受けて地域の高等学校への支援を計画する。</p> <p>(3) 生徒が地域で活動する機会を日常的に設けたり、地域、関係機関の方に教育活動に参加していただく機会を増やす。</p> <p>ア 「専門教科」「共通」や他の授業で積極的に生徒が地域に出かける。また、地域・関係機関の方を指導者として招へいする機会を計画的に設ける。</p> <p>イ 校内での評価と併せ地域・関係機関からも評価を受け課題について改善を図る。</p>	<p>(1)</p> <p>ア 連絡会以外に必要な担当者間会議を毎月開催する。</p> <p>イ 共同学習実施計画を作成し実施する。</p> <p>ウ 本校で年間2回以上の防災委員会を開催し、難波支援学校と合同での体制整備を進める。</p> <p>(2)</p> <p>ア ホームページを毎月更新して生徒の特徴や様子についてわかりやすく情報発信することができたか。</p> <p>イ 両校生徒の共同作業を行う機会を年間2回以上開催する。</p> <p>ウ 高等学校が必要とする支援について情報を集約し支援を行うための体制を整備する。</p> <p>(3)</p> <p>ア 年間2回以上の機会を設ける。</p> <p>イ チェックシートやアンケートにより地域・関係機関の方から得た評価を考慮して課題の改善を図る。</p>	<p>(1)</p> <p>ア 毎月の開催に加え、必要に応じて担当者会議を持つことができた。(◎)</p> <p>イ 両校で共通の実施要項を作成し、共通の認識を持って計画を立案した。(○)</p> <p>ウ 合同で防災・防犯に関する訓練、安全指導を実施した。(○)</p> <p>(2)</p> <p>ア ホームページを作成・更新し、全体や学年、進路に関する行事毎に「学校日記」を掲載し、情報発信に努めた。(△)</p> <p>イ 交流教育委員会を開催して、12月13日に本校2年生と大阪市立扇町総合高等学校と、3月17日に本校1年生と大阪市立鶴見商業高等学校ダンス部との交流会を実施する。生徒会が中心となり、各校の紹介や事前の生徒同士の活動等を行った。(○)</p> <p>ウ 今年度は支援の要請はなかった。ホームページや高校進学フェアへの参加やオープンスクールを実施し、本校の教育活動についての周知を図った。(△)</p> <p>(3)</p> <p>ア 複数の専門教科で外部講師を招いて出前授業を行った。人権学習として、地域の人権施設の見学を通して地域の歴史を学習した。また、併設の難波支援学校との合同行事「なんば・なにわ祭」で地域の方の指導を仰ぎ太鼓演奏を披露することができた。(○)</p> <p>イ チェックシートやアンケートについて十分検討することができなかった。(△)</p>
---	---	--	--